

機関番号：25406

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520170

研究課題名（和文）

『とりかへばや』伝本の流布状況を視点とした江戸時代における物語享受の研究

研究課題名（英文）

A Study of manuscript of *Torikaebaya Monogatari* in the Edo Period

研究代表者

西本寮子（NISHIMOTO RYOKO）

県立広島大学・人間文化学部・教授

研究者番号：70198521

研究成果の概要（和文）：『とりかへばや』伝本はすべて写本で伝わる。100 を超える伝本のうちこれまで未調査であったもの、新出伝本についての調査を中心に実施し、近世初期の一本ないしは数本から派生したとされる従来の伝本の伝存状況についての考え方を改めて確認、補強した。現在書写年時が判明している最も古い伝本の一つは寛延四（1751）年書写本であるが、書写時期が山岡浚明の活躍時期とほぼ重なることから、この時期に公家の故実家の手から和学者の手に渡り、師弟関係を軸に転写が繰り返されて広まっていったと考えられること、また、書込や施注に関わった人々が浚明の物語研究の達成に大きな影響を受けたとみられることを確認した。

研究成果の概要（英文）：*Torikaebaya Monogatari* has no original text and there are more than a hundred handwritten copies. Over the last three years, I have investigated 11 manuscripts of *Torikaebaya Monogatari*, two of which have not been known, and a manuscript of *Hamamatsu Chunagon Monogatari*. The oldest manuscript of *Torikaebaya Monogatari* was written by Shigenoi Kinkata and his sister in April 1751.

The result of the investigation shows that classical Japanese scholars, for example *Yamaoka Matsuake*, obtained manuscripts, their pupils copied them to learn their teacher's thought, then many manuscripts were completed.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	0	0	0
2012 年度	0	0	0
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：日本古典文学

科研費の分科・細目：文学・古代文学

キーワード：とりかへばや、中世王朝物語、物語享受史

## 1. 研究開始当初の背景

『とりかへばや』伝本については 100 本を超える伝存を確認している。伝本数は多いが異同が極端に少ないという本文の様態から、近世初期の一本または数本から派生

したと考えられてきた（鈴木弘道氏による）。伝本間に際立った異同が見られないことに加えて、早い段階で混態本が出現したことから、本文系統と伝本固有の特徴を見極めるのは困難を極める。したがって他の物

語に比べて『とりかへばや』の伝本研究は著しくたちおくれた。しかし、近時、書写年代は下るものの、転写の過程で意識的な改変の手が加えられたとみられる複数の伝本の存在が確認された。また、研究的態度によって享受していたことを窺わせる人物の存在が知られるようになった。享受史と関わらせるかたちで伝本研究を進展させることが可能な段階にきているといえる。

中世を通じてほとんど読まれた形跡のない『とりかへばや』がなぜ江戸時代中期以後急速に広まったのかということについては必ずしも明らかにされてはいない。素性のいい源流の一本乃至は数本を求める研究の方向とは別に、伝本の流布状況と転写や伝本に断片的に名を残す人物たちの書写態度やネットワークの様相を参照することで、その一端がわかるのではないかと考えた。

『とりかへばや』については、この10年ほどの間に、複数の伝本の所蔵者が変わり公的機関の所蔵に帰した。また複数の未報告伝本の存在も確認できている。このような時期だからこそ、従来あまり注目されることのなかった和学者の物語書写に注目し、停滞していた伝本研究を進展させるきっかけをつかむことができる可能性が高い。また、これまで知られてきた伝本についても追加調査によって得られるであろう新たな情報を加味して考察することで、『とりかへばや』享受の様相の実態解明が可能になると予想されることから、研究に着手することとしたものである。

## 2. 研究の目的

『とりかへばや』諸本の系統分類については、鈴木弘道氏、桑原博史氏らによる研究の成果により、おおむね4系統に分類されることが知られている。ただし、江戸時代後期の伝本が大多数であり、素性のいい伝本にかかる情報が得られないこと、諸本間に際立った特徴が見られないことなどからその後の進展がほとんどなかったのが現状である。

伝本数の多さの原因のひとつは、本居宣長の門人たちが転写を繰り返したことによることに気づき、『とりかへばや』蓬莱氏本系統の伝本をめぐる考察—本居宣長の奥書を起点として—(『国文学攷』178号)をまとめた。同論考をまとめるに際して利用したそれまでの調査の蓄積に基づいて、宣長以後と宣長以前と、二つの方向で享受史を捉え直すことが可能であると考えられるようになった。本文の様態の考察とは別に、伝本上に名を残す人物を追っていくことで、享受の様相をたどることができることになったのである。

後に新居和美氏により、比較的異同の大きい伝本が複数伝わっていることが報告され、意図的な改変の痕が認められる伝本をあら

たに一系統加える必要があるのではないかとの見解が示された。また、伊藤光中をはじめとする和学者たちの研究成果も明らかになってきた。提要、系図、年立を備えた光中の著作は、従来から知られてきた岡本保孝には先立つものの、天保年間の成果であり、かなり時代が下る。だが、享受史上貴重な業績であることは疑う余地はない。

以上のように、宣長以後、江戸時代後期の享受の様相の解明は着実に進んできている。本研究の目的の一つは、こうした研究の流れの中で、本来なら顧みられることのない末流の伝本についても考察の対象とし、和学者たちのネットワークを視点として享受の様相をさらにたどることにある。

では、光中は誰に学んだのか。光中は清水濱臣の門人である。濱臣の門人たちはどのように『とりかへばや』『浜松中納言物語』などの作り物語の書写、研究に関わったのか、和学者たちが師と仰いだ山岡浚明は物語とどう向き合ったのか、そもそも公家の手から和学者の手に渡ったのはどのような経緯によるものか、これらの課題については必ずしも明らかになってはいない。宣長以前の享受の様相の解明につながる諸課題について考察が、本研究のもう一つの目的である。伝本の流布状況と書写に関わった和学者たちにかかる情報を整理することである程度解明できるはずである。

和学者の事跡に着目して研究をすすめるにあたっては、比較的伝本数が多く、『とりかへばや』とよく似た流布状況を示す『浜松中納言物語』の享受の様相が参考になる。そこで、比較対照のため、『浜松中納言物語』についても併せて調査研究を進めることとした。また、浚明とその業績を後人たちはどのように考え、仰いだのかという問題についての考察も必要と考え、考察の対象に加えることとした。

## 3. 研究の方法

本研究においては、新出伝本の一つである寛延四年書写本を最初の手がかりとして、書写者である滋野井公麗の物語への関心のあり方を明らかにすることからはじめることとした。滋野井家、公麗周辺の資料の収集と情報の整理である。

ついで、新出伝本や未調査伝本のうち調査可能な伝本について調査をすすめ、同時に享受史上重要と思われる既調査伝本について補足調査を重ねる。これが本研究の中心である。これらを基本的な方法として、調査結果をこれまでの研究成果と照らし合わせることで『とりかへばや』の流布の実態の解明を試みる。

併せて、伝本数が比較的多く、享受史上、『とりかへばや』とよく似た伝存状況を示す

『浜松中納言物語』の流布状況の再整理を行う。また、ふたつの物語の伝本の書込、注などに名を残す人物、和学者たちに関わる情報、および関連資料の収集を進める。

さらに、浚明の出現によって進んだ物語目録についての情報収集と整理を行い、その展開の様相をたどる。

これらの方法により、江戸時代の物語享受の実態の一端を解明することを試みる。

#### 4. 研究成果

- (1) 三年間で調査、収集を行った『とりかへばや』伝本のうち、調査対象とした主な伝本は次の通りである。
  - ・九州大学附属図書館蔵音無文庫蔵3冊本  
袋綴。一面11行書写。浚明序あり。「音無文庫」「岩尾寿所蔵」等印あり。詳細な頭注、傍注あり。出版を企図した伝本である可能性が高く、重要伝本の一に加えるべき伝本。
  - ・九州大学附属図書館蔵音無文庫蔵1冊本  
袋綴。一面14行書写。浚明序あり。「音無文庫」「岩尾寿所蔵」「眞島蔵書」等印あり。頭注、傍注あり。索引作成に使用された形跡を窺わせる記号等が多数見つけられることから注目すべき伝本。
  - ・九州大学附属図書館蔵音無文庫蔵4冊本  
袋綴。一面10行書写。「音無文庫」「岩尾寿所蔵」「静幽文庫」等印あり。浚明序あり。頭注、傍注、校合あり。天保4年、源利義による識語あり。本文上の特色から注目される伝本。
  - ・茨城大学菅文庫蔵4冊本  
袋綴。一面9行書写。「静屋」印等あり。ごくわずかな書込あり。刊行の動きがあったことを窺わせる城戸千楯の書込あり。併せて所蔵される『うつほ物語』関連資料と共通する特徴が見受けられ、精査が必要。
  - ・大洲市立図書館蔵矢野玄道文庫蔵2冊本  
袋綴。一面15行書写。文化7年中島満写。書込あり。改作本系統本文に近い特徴を見せており注目される。
  - ・無窮会神習文庫蔵4冊本  
袋綴。一面10行書写。「田中蔵書」印あり。ごくわずかに書込あり。「升」として書込あり。間宮升芳とみられる。
  - ・国文学研究資料館蔵長谷文庫旧蔵5冊本  
袋綴。一面11行書写。「木村蔵書」「長谷文庫」等蔵書印あり。墨書書込あり。改作本系統。天理大学附属図書館蔵の一本に通じる特徴を見せている。
  - ・国文学研究資料館蔵南三木氏旧蔵3冊本  
袋綴。一面9行書写。朱筆書込、付箋あり。「米田蔵書」「赤穂城下南三木氏旧蔵」印あり。本文系統の再構築を行う際に参考とすべき重要伝本の一つ。
- (2) この間、これまで報告されたことがなく、

新たに伝存を確認した伝本は次の3種である。

- ・県立広島大学蔵14冊本  
袋綴。一面8行書写。「稲屋之印」「岩井蔵書」印あり。岩井良雄旧蔵。ごくわずかな書込あり。分冊は便宜的なもの。明治極初期の書写であるが、国学者の間で転写されたことが知られる一本。
  - ・個人蔵1冊本  
綴。一面12~13行書写。巻一のみ零本。ごくわずかな書き入れあり。識語あり。現在書写年時の知られる伝本のうち最も古いものとして注目される。
  - ・島根県立図書館蔵4冊本  
袋綴。ごくわずかな書込あり。誤写が多く末流の伝本と見られる。地方への伝本の伝播を考える際に参考とすべき一本。
- (3) このほか、本研究着手以前に調査したことがあるが今回改めて追加調査を行った伝本、国文学研究資料館に所蔵される紙焼、マイクロフィルム等で閲覧した資料、複写等により収集した資料があるが、それらについては以下に掲げたもののほかは掲出を省略する。
    - ・実践女子大学附属図書館蔵黒川文庫蔵3冊本  
袋綴。一面12行書写。「竹内蔵書」「紅梅文庫」「岡田眞之蔵書」「篁園文庫」「実践女子大学図書館印」等蔵書印あり。文政五年竹内南淵書写であることを示す識語、天明五年宣長書写本を加藤磯足が書写したことを示す識語あり。
    - ・実践女子大学附属図書館蔵黒川文庫3冊本  
袋綴。一面14行書写。「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」「岡田眞之蔵書」「肥島原藩坂本氏蔵」「紅梅文庫」「月明荘」「実践女子大学図書館印」あり。磯足書込のほか、天保七年梅の屋を名乗る人物の書写であることを示す識語あり。
    - ・東海大学附属図書館蔵桃園文庫蔵4冊本  
袋綴。一面11行書写。「榊原蔵」印あり。若干の朱の書込あり。
    - ・東海大学附属図書館蔵桃園文庫蔵1冊本  
袋綴。一面25行書写。「月明荘」印あり。若干の傍書あり。
    - ・東海大学附属図書館蔵桃園文庫蔵3冊本  
大和綴。一面9行書写。「松平確堂蔵書」印あり。異本注記等若干の書き入れあり。巻四欠。
    - ・東海大学附属図書館蔵桃園文庫蔵4冊本  
袋綴。一面10行書写。「神村長豊蔵書」「青・書屋」等印あり。巻一欠。伊藤光中の事跡を知るための基本資料として貴重な伝本。
  - (4) 関連資料として調査、収集の対象とした資料のうち、享受史上重要な資料として京

都大学所蔵『とりかへばや系図』がある。本多忠憲の作成にかかると認められるものを伴直方が書写したとされるものである。『とりかへばや系図』については、他に岡本保孝作成のもの、伊藤光中の作成にかかるものが知られる（東海大学付属図書館蔵『とりかへばや』付載）。保孝作成のものは作成時代も新しくまた簡略なものである。光中作成系図は天保四（1833）年完成の「提要」に付された光中自筆資料で貴重であるが、本多忠憲作成の系図の方が成立においては先行する。現在の研究に照らせば誤りと思われる認識も見受けられるが、研究的態度で読まれた早い時期の資料である。また光中が忠憲系図を参照した形跡はないが、比較的早い時期に考証家が作り物語に関心を示していたことを窺わせる点、当該資料が木村正辞旧蔵であった点で貴重である。

(5) 『とりかへばや』と伝本伝存状況においてよく似た傾向を示す『浜松中納言物語』については小松茂美氏、池田利夫氏らに詳しい研究があるが、今回いくつかの伝本について改めて調査を行った。そのうちの一本、京都大学蔵本は滋野井公麗の所蔵であったことを示す印が押されている。従来、公麗手沢本とされてきた資料である。当該伝本と前に記した寛延四年書写の『とりかへばや』との関係については筆跡の検討を続け、慎重に判断する必要があるが、江戸時代中期以降、和学者によって転写がくりかえされる以前、公家の故実家によって物語の書写、収集が行われていたことが、これらの資料の伝存によって判明した。滋野井家は『源氏物語』研究で名を馳せる中院家ゆかりの有職の家として知られ、とりわけ公麗には多くの著作がある。故実考証のために広く物語を収集の対象としたと推測される。

(6) 滋野井公麗の自筆資料は諸機関に分散して所蔵されている。武井和人氏により、公麗が一条兼良の継承者としての自負をもって研究、著作活動を続けていたことが明らかにされているが、滋野井家文書の一部の解読により、公麗が物語をはじめとする仮名資料に関心をもち、読んでいたことが確認できた。『とりかへばや』あるいは『浜松中納言物語』についての直接の言及はいまだ確認できていないが、自筆資料および手沢本の伝存に照らせば、江戸時代中期において、まず公家の故実家によって物語に関心が寄せられて探索、収集が始まり、和学者の手に渡っていったという道筋が考えられる。

(7) 『浜松中納言物語』については、国会図

書館蔵本、大阪府立中之島図書館蔵本をはじめとする数本を調査の対象とした。足代弘魚と、弘魚と親交のあった人物の関与が確認できたほか、「書写の過程で本文が他の本文と混じり合い、新たな本文が生成されていく過程」を解明する手がかりが得られた（赤迫「本居学派による『浜松中納言物語』の流布について—大阪府立中之島図書館蔵中西文庫本を手がかりに一」）。

(8) 山岡俊明が作り物語に関心を示したのは歴史を明らかにする史書に通じる性格を物語に見いだしていたことによるが、俊明の著作の一であり、「江戸の物語研究のひとつの到達点」（小川）ともいふべき『古物語類字抄』の伝存からは、他の物語目録とは異なる流布状況を読み取ることができる。黒川春村を経て藤岡作太郎ら近代の研究者へと、物語目録が次世代に受け継がれる様相の一端が解明された（小川「物語研究の継承—『古物語類字抄』の享受を例として—」）。

(9) 伝本伝来の状況、書簡・随筆等の記録から、『とりかへばや』が故実研究に取り組む公家の手から和学者たちに物語が渡ったらしいこと、和学者たちの転写は俊明を頂点とする江戸時代の語学研究者の強い関心を読んだことが窺われる。今回の調査、資料収集によって明らかになった物語享受史に名を残した人物の多くは他の物語の伝本においても名が見られることを確認している。調査対象をさらに広げた調査により、その実態についてさらに追究する必要がある。今後の課題の一つである。

(10) 本研究の研究成果については『『とりかへばや』伝本の流布状況を視点とした江戸時代における物語享受の研究』成果報告書を作成して、現時点でのまとめとした（2011, 3 発行、総頁数 85 頁）。

(11) 本研究によって解明できたのは物語享受の実態のごく一部である。所蔵情報を得ていながら、調査許可が得られず未調査のままとなっている伝本がある。伝本に名を残す和学者にかかる情報整理もいまだ継続中である。ただし、源流の一本ないしは数本に近づくことができる感触は得られた。すべての現存伝本の調査が得られる機会を窺いつつ、今後も収集資料、情報の整理を続ける必要がある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

- ① 西本寮子「『とりかへばや』と『源氏物語』—句宮三帖への関心を視点として—」、『源氏物語の展望』第 8 輯（三弥井書店

- 刊)、査読無、2010、pp.114-145
- ② 小川陽子「黒川春村『古物語類字抄』の発展」、『古代中世国文学』25号、査読無、2010、pp.13-31
  - ③ 赤迫照子「『夜の寝覚』の撰関体制—おほやけの御後見の相対化と〈藤原氏の物語〉—」、『平安後期物語の新研究』(新典社刊)、査読無、2009、pp.113-135
  - ④ 西本寮子「院政期から見た『源氏物語』—人物造型の方法をめぐって—」、『広島女学院大学公開セミナー論集』26、査読無、2009、pp.89-110
  - ⑤ 西本寮子「江戸時代中期における物語の流布と享受—『とりかへばや』を例として—」、『国語と国文学』86巻5号、査読有、2009、pp.117-126

〔報告書〕(計1件)

- ① 報告書「『とりかへばや』伝本の流布状況を視点とした江戸時代における物語享受の研究」、2011・3発行、総頁数85頁  
(赤迫照子「本居学派による『浜松中納言物語』の流布について—大阪府立中之島図書館蔵中西文庫本を手がかりに—」、pp.7-25、赤迫照子「国立国会図書館蔵『浜松中納言物語目録』翻刻」、pp.37-60、小川陽子「物語研究の継承—『古物語類字抄』の享受を例として—」、pp.26-36、西本寮子「寛延四年滋野井公麗書写『とりかへばや』(巻一)翻刻」、pp.61-85を含む)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

西本 寮子 (NISHIMOTO RYOKO)  
県立広島大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：70198521

### (2) 研究分担者

赤迫 照子 (AKASAKO SHOKO)  
広島大学大学院・文学研究科・研究員  
研究者番号：70452618

### (3) 連携研究者

小川 陽子 (OGAWA YOKO)  
松江工業高等専門学校・助教  
研究者番号：50512266